
初夏、月の夜に

temso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初夏、月の夜に

【Nコード】

N5505A

【作者名】

temso

【あらすじ】

特にどうということのない二人のなんにもない会話。

テツは夜空を眺めていた。

月、星、雲、空。白、黒、蒼。見えるのはそれだけ。

やりかけの宿題は机の上に放置したまま、スタンドの電気もつけたまま。ふと、勉強なんかやっている自分がばかしく思えて、ずっとベランダに出た。

初夏の風は気持ちいい。今まで十四年生きてきた経験上、もう一ヶ月もすればここも蒸し風呂のようになってしまふのだろうけど、今気持ちいいのでそれでいい。

もつとも、もう蚊には注意が必要な時期になってはいるが。そうしてただボケつと空を眺めていると、近くで網戸の開く音がした。

視線をやる。一人の少女が隣家の二階の窓からこっちに顔を出していた。

「なにやってんの？」

「なんにも」

気の抜けた声で答える。少女は名を優という。テツの通う中学の同級生で、生まれたときからここに住んでいる。テツは五年ほど前にここに越してきたばかりだ。

「宿題終わった？」

「やってないよ」

そっちはどうなんだ、と問いかけてみるが、テツにはだいたいの予想は出来ていた。

「やるわけ無いじゃん」

「だよなあ」

なんとなく口元で笑う。優も同じように口元を緩めた。優も手すりにあごを乗つけた。

「あーあ、なんで受験なんかしなくちゃいけないんだろ」
「なんで？」

割と優等生な方の彼女がこんなことを言うのは珍しい。

「だって、めんどくさいじゃん」

「同感。まあ、お前ならそのまんまでもいい高校行けるんじゃないの。俺と違って」

若干嫌味をこめて言ってみたが、実際彼女はなんにもしなくても成績はいい。実戦に強いというか、天才タイプというヤツか。
ところが、彼女からのレスポンスは予想とちよつと違った。

「……いい高校つて、なに？」

「え？」

「あんたが今言つたいいい高校つて、どんな高校のこと？」

「え、えーと。……偏差値とか？」

「いい高校行つたほうがいいって言われるのは、その方が自分にとつてプラスになるから、つてことだよな？じゃあさ、偏差値が高いと何がプラスなわけ？」

「なんだよ、どうしたの」

ちよつと目を細めて優をにらむ。

「いやあ、なんとなくさ。こう、思うわけよ。自分はなんで勉強なんかしてるんだろ、つて。世の中にはもつと面白いことがあるてるつていうのにさ」

勉強なんかしてないじゃん。

テツは内心かなりそう思ったが、いつもとなんか彼女の様子が違つていたので言うのはやめておいた。

それに自分自身、優の言っていることがなんとなく分かる気がした。
「そうだなあ……。俺、どうせどこの高校行つたつて部活ばっかやってるんだろっし」

「あんたはそうだろうね」

やれやれ、と優は首を振ってみせた。テツはちよつとむっとする。
「なんだよ」

そりゃあ、自分がスポーツバカなのはちょっとは分かってる。

「じゃあお前は？なんかやりたいこととかあんの？」

聞くと、優の目がまっすぐこっちを向いた。こころなしかキラキラしてるようにも思える。

「よくぞ聞いてくれた。私はね、バイクに乗りたい」

「はあ？」

「バイクだって、バイク。知らない？十六になったら免許取れるんだよ」

「あー、あの、あれ？ピザ屋が乗ってるようなやつ？」

「ちつがっ！」

怒鳴ると、優は引っ込んでしまった。しばしあっけに取られる。呆けたままちよつと待っていると、彼女が再び顔を出した。なんかの雑誌を持っている。

「ほら、これ！こういうの！」

言いながら優は手にした雑誌をテツに向かって放り投げる。ばさりという音がして、ページが広がった。

「うわとと」

かろうじてキャッチ。そこへ優の声が飛ぶ。

「二十六ページ！」

急かされてあわててページをめくる。見たところバイク雑誌のようだ。随分と読み込まれたようで、表紙はよれよれになっている。

「あつた。これ？」

お目当てのページを掲げてみせる。彼女は大きく頷いて、読んでみる、と言い放った。

「はいはい」

そこにあつたのは一台のバイクを特集した記事だった。そのバイクの写真がでかでかと中央にある。

「ゼットゼットアール、よんひゃく？」

「ダブルズイーアール！」

読み方がちゃんとあるらしい。

カワサキ社の高速スポーツアラー、ミドルクラスに快適な巡航性能。

見た目に鮮やかなフルカウル、パワフルな水冷DOHC4バルブ4気筒エンジン。

メカにうといテツにはなにがなにやらさっぱり分らない。

「えーと」

「かつこいいつしょ？」

「ええ、あ、うん。そだな」

とりあえずそう答えておく。

「そいつに乗って、あちこち走り回りたいわけ」

「あ、そう」

じろりと優がにらんでくる。

「あんまり興味なさそうだねえ」

「いや、だつてなあ」

ほんとに興味ないし。

まあいいわ、と優は鼻を鳴らした。

「あんたも男じゃないよね、これ見てなんとも思わないなんて」

「お前は女だろ……」

テツはバイク誌を相手の窓に投げ返した。優はうまいことキャッチするが、折り目がついていることに気がついて憤怒した。

「なにすんの!？」

「いや、最初にやったのお前だろ」

「くっ」

「……なんの話してたんだっけ？」

「あ、えーと。……受験？」

「あーそうそう。高校の話だ」

「……」

「……」

沈黙。風の音。雲の流れる夜空。

「……なんか、どうでも良くなってきた」

「俺も」

こうやってグダグダしゃべっているだけの時間と、勉強してる時間と。

親や教師に言わせれば後者のほうがはるかに大事なんだろうが、二人にとってはどっちもどっちだった。

「……もう寝よ。あんたは？」

「俺はもうちょっとやる。宿題終わってねえし」

「やったって終わんないくせに。まあいーや、お休み」

「うっせ」

網戸の閉まる音、遠ざかっていく足音。

たまっている宿題は優の言うとおりどうせ終わらないだろうが、やる。

受験とかそういう問題はまあ、どうせまだちょっと先の話だし。

長続きしないと自分で分かっている気合を入れて、テツはベランダを後にした。

（後書き）

ふと思いついたので書いてみたものです。

劇中のバイクはあこがれているモデル、書きたかったので書いてみました。

こんななんでもない文章ですが、なにかご意見でもあれば、教えていただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5505a/>

初夏、月の夜に

2010年10月30日09時48分発行